

明責任を果たすべきです」片山事務所に取材を申し込んだが、代理人の弘中惇一郎弁護士は「貴誌への対応は控えさせていただきます」と回答を拒否。

その片山氏は、小誌が報じた「国税口利き疑惑」に名誉を傷つけられたとして訴訟を起こしている。十二月三日に第一回口頭弁論が開かれたが、翌日の会見で、片山氏は「弘中氏に

お聞きしたらすでね、『具体的反論が相手(文春)からゼロだったということに尽きるんじゃないの』と。(略)反論事実がひとつもなかったと」などと説明している。

詭弁という他あるまい。言うまでもなく、第二回目を以降、しっかりと反論していく予定である。

いずれにいたしまして、異常でございませう。

音声入手「本庁は歪んでる」 神社本庁トップ 天皇の場が怒った



田中氏の「辞意撤回文書」 廣司統理と田中総長(右)

「組織のナンバー2である総長が突然辞意を撤回したことで、混乱に拍車がかかっています。ガバナンスが問われる事態に、遂にあの御方の堪袋袋の緒が切れました」(神社本庁関係者)

全国八万社の神社を束ねる神社本庁で、一体何が起きているのか。

「神社本庁の組織は、事務方のトップである総長の上

に、神社界を象徴する『統理』が存在する。統理と総長は、いわば天皇陛下と総理大臣のような関係です。

統理は代々、旧皇族や旧華族が主に務めてきました」(同前)

今の統理は廣司尚武氏(73)。公家の最高位である五摂家の一つ、鷹司家の二十八代目。昭和天皇第三皇女の養子で今上天皇の義理の甥にあたる。統理になる前はNFC通信システム社長や伊勢神宮大宮司を歴任してきた。

一方、総長を務めるのが田中恒清氏(74)。石清水八幡宮宮司や神社本庁副総長などを経て、八年前に総長になった人物だ。

「この二人の確執が強まっています。ここ数年、職員宿舍の格安売却疑惑や宇佐神宮の宮司解任騒動などの醜聞が相次ぎ、最近では皇室批判の音声流出で退任した靖国神社前宮司を推薦したのも田中氏らとされている。田中執行部のガバナンスの酷さに内部の反発が高まっているのです」(同前)

そんな中で飛び出したのが今年九月、東京・代々木の神社本庁で開かれた役員会における、田中氏の辞意発言だった。入手した音声

や議事録、証言などをとに振り返ってみよう。

「天皇陛下の代替わりの年を穢れない状態で迎えたほうが良い」という趣旨の廣司氏の発言に対し、田中氏は「統理様からそういうお話があった以上、私は悔しいし、残念であります。総長を辞させていただけです。唐突な感じで驚きました」(出席者)

出席者は皆一様に衝撃を受けたものの「真摯に受け止めていただきたい」と統理はこれを了承。朝日新聞などは「辞任の意向」と速報を打った。

ところがその一カ月後、事態は一変した。

田中氏は臨時役員会を招集するや、「あれは正式な辞意ではなかった。今後も総長職をまっとうしたい」と掌を返したのだ。

これには廣司氏も我慢ならず、「覆されたということが非常に私は気持ち悪いですね。(中略)やっぱり人の上に立つ人、あるいは組織の長は、自分の言ったことに責任を持つ、そして

軽々しく変えてはいけません」と異例の苦言を呈した。

だが、聞く耳を持たない田中氏は、さらなる手を打った。辞意撤回を通達する文書を、進退にまつわる任命権を持つ廣司氏への了解を取らずに、全国へ発送させた。

この暴挙に対し、廣司氏がさらなる怒りをあらわにしたのが十月二十四日に開かれた役員会だった。二十人弱の出席者を前に、廣司氏はこう発言している。

「辞意撤回の通達文について」文書を出すに当たって統理の了解を取っていないです。私は知らないんですよ。そういうのが出たっていうのを後から聞いてね……。(中略) 総長の進退問題を扱っているにもかかわらず、統理に知らせなくていいんだけって言うのが本当に不思議なんですね。本庁の決裁のメカニズムっていうのが、やっぱり歪んでいる」

言葉の端々に田中総長と執行部への不信感を強くにじませる廣司氏。一方の田中氏は、神社界の政治部

三菱の嫌われ者か、改革者か 革新機構 田中社長の「信頼度」

「辞任会見で『たとえ一円でも引き受けていた』と話していました。彼が最後の最後まで拘ったのが報酬でした。これに対し、菅義偉官房長官は『報酬額で政府に抵抗するなんて許せない』と怒り心頭。経産省の嶋田隆事務次官も『田中氏に二兆円を預けられない』と話していました」(経産省関係者)

「二兆円規模の投資能力を持つ国内最大の官民ファンド産業革新投資機構(J-INC)。十二月十日、田中正明社長(66)が、取締役九人の辞任を表明する異常事態に見舞われた。

「J-INC(当時はINCJ)は〇九年に設立。今年九月に改組し、田中氏の社長就任は、彼と親しい金融庁の森信親前長官の紹介で決まりました」(経産省記者)

「日本はリッジ」と語った田中氏

「敗」と、糟谷氏に責任を取らせる形で、J-INC連絡室室長を兼務させることを決めたのです」(経産省幹部)

両者の対立は高額報酬問題にとどまらない。

「報酬がブラックボックス化する孫ファンドの立ち上げや、米公開株やデリバティブへの投資など、『これは日本の産業育成に繋がらない』と省内で批判が強まりました」(前出・経産省関係者)

十一月二十四日に行なわれた嶋田次官との二度目の会議で、報酬の白紙撤回を伝えられた田中氏は「信義に悖る」と一喝し、中座したという。田中氏は、一体どんな人物なのか。

「滋賀県出身の田中氏は東京大学法学部を経て、三菱銀行に入行。同行では抜群の語学力と人心掌握術で企画・人事加という出世コースを歩んだエリート中のエリートです。現在三菱UFJフィナンシャル・グループ社長の平野信行氏とは長年のライバルで、頭取争いを繰り広げて、最後の肩書きは副社長でした」(三菱

「〇四〇五年の三菱自動車のリコール隠し事件の際に、救済策をまとめ上げたのが田中氏でした。また〇八年に子会社化したユニオン・バンクのCEO就任時も『全米十位にのし上げる』とぶって、『行員の気持ちを一気に掌握した』と自画自賛していました」(同前)

そんなエリート銀行マンにも難点があった。

「いわゆる、キレ者で非常に優秀な人物である反面、徹しい要求を突きつけられ、精神的に追い込まれた部下も少なくない。行内の人望のなから頭取レースに敗れますが、当時は対立候補



給与1カ月返納の世耕大臣

自分の感情だけで

次号12月27日号は創刊3000号記念特大号(12月28日)発売、特別定価440円です